

特集 「編集委員今年の抱負 2009：経系から横系まで」

## 個性ある一研究者を目指して

古川 忠延 東京大学大学院情報理工学系研究科



所属研究室の先輩に教えていただいて本誌の学生編集委員を務め始めてから、約 1 年半が経過しました。学生編集委員の主な仕事は、本誌連載中の学生フォーラム AI Inter-View のために研究者の方にインタビューを行い、記事を執筆することです。この 1 年半の間に、私は 6 人の大学教員、2 人の企業研究者の方からお話を伺う機会がありました。そのいずれの機会でも、研究者の方々のご経験や今後の研究に対するビジョンの持ち方に私は感銘を受けることばかりで、私自身の将来を考えるうえでこの仕事は非常に貴重な経験となりました。以降ではこれらのインタビューで伺ったお話を踏まえながら、今春から企業に就職する私の抱負を語りたいと思います。

一口に「研究」といっても、大学で行われるものと企業で行われるものでは性質が異なるということをよく耳にします。前者が基礎から応用まで幅広いテーマを対象にするのに対し、後者は企業に利益をもたらすような実用的なテーマを対象が絞られる、といった具合です。実際、研究をビジネスにしようとする費用対効果の考慮や事務的な作業の増加から、研究として浅くなってしまいう危険性を感じたことがあるというお話も何度か聞いています。そうした点から私は——これは完全に私の無知によるものだったのですが——企業における研究に対する意識のレベルを、大学でのそれと比較して低く見ていた時期がありました。

そんな中で一昨年、毎年国内外問わず数多くの論文を主要な学会に投稿し、自らワークショップの設立もされている企業研究者の方にインタビューをさせていただく機会がありました。そこで我々が伺ったのは、高い技術を結集して製品をつくり、同時にその営業をしながら、というよりもむしろ営業を通じてこそ、顧客の声を直接聴いてさらに技術を洗練していくことができるのだ、というものでした。アグレッシブな氏のお話は私にとって衝撃的で、企業における研究の意識の高さに気づかされて目から鱗が落ちた気分だったのを覚えています。このインタビューは、私の大学院修了後の進路を考え直す一助にもなりました。

同様のお話を、昨年大学の研究者の方へのインタビューの際にも伺いました。それは「社会を変えるための研究をするためには現場を知り、それを解決するために新しい理論をつくりだしていかなければならない。そうした現場指向の研究にこそ深みを感じる」というものでした。詰まるところ企業・大学どちらのものであっても研

究は研究であり、どちらも同じ方向を向いているものなのだと感じています。両者の中で異なるのは研究をするうえでの制約であり、それは研究者としての自分のあり方によって解決していくことが大事なのだということ学びました。

では、良い研究者となるために必要なこととは何だろうか？ これもインタビューの中で「若手へのメッセージ」として、毎回たくさんのヒントをいただきました。それらに共通して私が感じたことは、「個性をもつ」ということの重要性です。ここでいう個性とは、人と違った斬新なことをしようというのではなく、研究者としての確固としたスタイルや信念のようなものです。そのためには、興味のあることでよいので問題を見いだし、とにかく自分の手足を動かしてそれを解決していく。その繰返しで自分のもつポケットを増やし、研究者として根を張っていく。そこに個性が生まれるのだということです。8 度のインタビューに共通して私が感じたことは、大学・企業を問わず、また、Web・音声・ユーザインタフェース・その他さまざまな分野を問わず、すべての研究者の方が自身の研究に高いプライドをもって取り組んでおられるということでした。その根底には、相応の経験や知識から生まれた個性があるのだと思います。

さて、順調にいけば私は今春に大学院の博士課程を修了し、一企業で研究開発の仕事に携わる予定になっています。就職活動では博士課程まで進んでから企業に就職することに対して周囲から疑問をもたれることもありましたが、こうしたインタビューの経験もあって企業研究者となることを選択しました。入社後は——新入社員として大きなことは言えませんが——学生編集委員として学会との関わりをもってきたことに恥じない仕事をしていきたいです。例えば、今回私が企業の研究というものを理解していなかったことは調査不足によるものですが、現実には、学生にとって企業の研究は接する機会が少なく、イメージがわきづらいように思います。これを解決できる一つの場合が学会であるので、うまく利用してアピールできればと考えています。そして、積極的にこうした経験を積んで個性ある研究者を目指していくことを、新年の抱負にしたいと思います。特に、修士課程より私が研究の面倒を見ていただいている師匠も個性の重要性を説いておられ、私は日頃から口数の少なさを形容して「侍のようになれ」と言われています。武士のような一本筋の通った個性を出せるよう、成長していきたいと思っています。